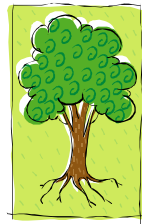


アララギの苗



アララギの苗の一束届きけり

春の信濃を偲びつつ植う

窓外の古い柿の木が滴るような萌葱の若葉をそつと広げ始め、やわやわと風にそよぐ、まさに風薫る五月の朝のことである。

宅急便で長さが一メートル近い細長い段ボールの荷物が届いた。差出人を見ると東京の妹からであった。

「ああ、この間電話のあったアララギの苗だわ」
私はすぐに納得した。

六年前、私は四十余年過ぎた東京から夫の郷里である薩摩の人來に戻ったのだが、饒別として妹にアララギの木を一本所望した。妹の婚家は信州の富士見にある山林地主であり、空き地に何本かのアララギを植えてあると聞いていたからである。

アララギは鹿児島では殆ど見かけないが、信州育ちの私には馴染み深い樹木である。貴族の持つ笏の材料だったことから、「一位（イチイ）」の木とも云われるらしいが、私たちは通常「ミネソウ」と呼んでいる。常緑の針葉樹で、葉脈なのが筋に直角に1・ほどのやや肉厚な針葉が対生に並ぶ。鹿児島で庭園に枝を形作りたいぬまきや柘植をよく見かけるが、信州ではアララギをよく見かけるが、信州ではアララギを同じように使っていて、今は駐車場になつてしまった実家の泉水の周りにも六七本あつたろうか。

雌木と雄木とあつて、雌木は秋に赤い小鈴のようにな下向きの可愛い実を着ける。真ん中の黒い種は大きめだが、皮も果実も柔らかく甘い。子供の頃は五六粒を一度に頬張つて果肉を食べ、ペツと種を吐き出したものだった

信州の形見として、私は背丈ほどの一本を庭に植えたかった。しかし農学博士で大学教授の妹の夫は、

千葉大学から九州大学に移っていて、住まいが博多だったから、時折の帰郷では私のお願いまでは手が廻らなかつたらしくそのままになっていた。

その義弟は一昨年定年となり、東京農大に移ったので現在は東京住まいである。信州での生活の割合も多くなっているらしい。昨年の秋、例年どおり薩摩芋を送るつかと聞いたたら、今年はどうさり薩摩芋を作ったからいらぬとの答えだった。

先日その妹からアララギの苗が手に入ったから送るとの電話があつた。畑に植えておいたものは、もう成長して、それを送るのはとても大変だから苗にしたとのことだ。二十本もあるから今のうちに植えるところを決めて穴を掘っておいたほうがよいと言つた。

「姉さんのところは広いから」

と妹は言った。私は妹が忘れていなかったことが嬉しくて、「ウンウン」と答えたが、実際は何もしていなかった。

箱を開けると新聞紙に包まれ、根元を水苔で巻い

た三四センチの苗の束を水苔で巻いた三四センチの苗の束が出て来たが、二十本と言つても両手が出て来たが、二十本と言つても両手で一握り程のものだつた。夫に「何処に植えよつか」

と聞いた。垣根にもなるからと言つと裏の足洗い場を隠すようなし字に植えよつかと言つた。

早速庭に出た。夫がシャベルで穴を掘り、底に油粕を入れて土を少し戻す。私がその後、苗を植えて根元の土をしつかりと手で押さえた。あらかじめ穴を掘っておく程もなく一時間ほどで作業は終わった。ホースでたっぷり水をやりながら、どれが雌木で雄木なのか見たが分からなかつた。大きさもまちまちで、枝の多いものや貧弱なものもあつた。

一週間経つて、見るとはや新芽を出し初めている。木の勢いもそれぞれだから、ほんの少ししか着いていないものもあるが、ダークグーンの葉先に鮮やかな黄色の新芽が映えている。

実は我が家の庭は家を建て替えた折りに、水はけが悪くぬかるるので砂を何層にも入れたこの辺の砂は

シラスである。植えながらそのキシキシとした感触に、樹が馴染んで育ってくれるかどつか一寸気掛かりだったのだ。改めて苛酷な寒さに耐えて生きて行かなばならないアララギの生命力を認識したことだった。

「アララギ」という左千夫や赤彦などの短歌の結社があつたが、地味で素朴で、しかも素晴らしい生命力あるこの樹の名をとつて結社の名前とした意味が領けた。そして現在挫折していようと、きつとまた再生することだろう。

まだ枝繕いもせず、恰好悪くも自由に枝を伸ばして、あちこちぶつかっているその姿に信州の田舎育ちの粗野な私を重ねながら、薩摩に根付くことを思い眺めているこの頃である。